

「リリちゃんをうちのエイベルと対決させる！？それ本気で言ってるのか？お前も知っての通りうちのエイベルは性格に難ありというか性根が真っ黒というかなんというか・・・ああ、いや！俺は別に構わないんだけど・・・でも、なんでまた急に？リリちゃんのことあんなに甘やかして可愛がってたのに。妖精同士の対決って、ぶっちゃけ何でも有りのデスゲームみたいなもんだから結構えげつないだらう？・・・え？ああ、なんだよ、そういうことか・・・まあ、お前の歳を考えれば遅いくらいだもんな。そうか、リリちゃんってお前一筋だもんなあ。まあ俺等にも旨味がある話だし、利用されてやってもいいぜ♡・・・あ！ウソウソ！もう揶揄わないから！止めるのナシ！よし！じゃあ早速準備しようぜ！」

・・・
・・・
・・・

大輪の薔薇が咲き誇る豪華な中庭に面したテラスには、魔法石で作られた大きなテーブルが設置されていた。そしてそのテーブルの上には、頑丈な鉄格子がはめられている。まるで大きな獣を飼う為の檻のようなフィールドの中では、二人の妖精が少し距離をもって対峙していた。

眩い程の金髪を腰まで伸ばした、美しいビスクドールのような姿をした妖精はリリーシュカ。そして彼女と対峙している蜂蜜色の髪をした、儂げな美少年の様な容姿をしている妖精がエイベルだ。彼等は共に虹色に透ける羽根を持ち、大きさは成人男性の手の平程しかないが、どちらも人間離れした美しい容姿をしていた。

この世界ではいくつかの種族が共存して暮らしている。彼等のような妖精族は魔法が得意な為、彼等の能力を借りる事のできる『契約』を望む貴族が多い。しかし妖精と契約する為には、彼等に気に入られるような何かがないといけなかった。長い時を生きる妖精達が人間に手を出す理由、それは好奇心を満たす為でしかなかったのだ。

そんな気まぐれな妖精族の中でも、リリーシュカは特に気難しかった。酷く傲慢で我侭な性格だったが、どこにいくにも何をするにもついて回るほど、ルイスの事だけは気に入っていた。

リリーシュカは風に揺らめく美しい金髪を手でサラリと払い除けながら、陽の光が反射する湖面の様に美しい煌めく瞳を鋭く歪めて、相手を睨み付けた。

「ふーん？今日の対戦相手はアンタなの？ルイスが私のために用意した特別な相手だっていうから期待してたのに・・・風が吹けば飛んでいきそうなほどなよっちい奴が来るなんて、拍子抜けだわ？」

彼女は既に勝負が付いたと言わんばかりの態度で、美しい羽根をパタパタと不満気に羽ばたかせた。しかしそんなリリーシュカの悪態にも、エイベルが気を悪くした様子はない。挨拶の代わりなのか胸に手を当てながら、寧ろ楽しそうにニコニコとした笑みを浮かべている。

「あはは、そういうリリーシュカさんは聞いていたよりも、とても可愛らしい方ですね・・・正直に言うと、とても驚いています」

エイベルは神秘的なアメジスト色の瞳を三日月型に細めながら、ふわりと微笑んだ。エイベルの蜂蜜色の髪はさらさらと柔らかそうであり、更には温和な表情を浮かべているために、全く持って今から対決をするようには見えない。しかしリリーシュカはその優しい気な微笑みにも、馬鹿にしたような嘲笑で返した。

「フンッ！ペラペラ喋るおしゃべりな男は大嫌いなもの！こんなくだらないおしゃべりをする為に来た訳じゃないわ。だから・・・早くやりますよ！」

リリーシュカは得意の炎の魔法を展開しようとするが、その直前、エイベルに人差し指をズイツ！と突きつけられて、思わずポカンと口を開いた。

「・・・はっ!？」

「ちょっとだけ待ってくださいよ。今回のルール、まだ決めていないでしょう？」

リリーシュカは途中で遮られた事にイライラしながら、目の前に差し出されていた指を払い除けた。

「フンッ！ルールなんてまどろっこしいもの必要ないわよ！相手に負けを認めさせた方が勝ちで良いでしょう！」

リリーシュカは自分の勝ちを疑う気持ちなど全く無い様子で、ルールを作る僅かな時間を持つことすら厭わしそうだ。エイベルはリリーシュカに払われた手を擦りながら、困った様に微笑んでいる。

「・・・リリーシュカさんがそう言うならそうしましょう。『相手に負けを認めさせた方が勝ち』ですね？」

しかしエイベルがその事を確認するよりも早く、リリーシュカが魔法を使ってエイベルへと炎の球体を連続で打ち込んだ。腕を伸ばせば触れられる程の至近距離で、更には恐ろしい程の早さで何発も連続で打ち込まれたそれは、頑丈な檻がガタガタと揺れる程の衝撃であった。

妖精の対決を貴族同士で行う場合、契約主の趣味で催される事もあるが、殆どの場合は決闘と同等の意味を持つ激しいものだ。その為、リリーシュカのした事は反則という訳ではない。

檻の中には激しい爆発により粉塵が覆い尽くしていて、中の様子が一切分からない。対決中、外にいる観客には一切の影響の無いようにテールや檻には特殊な魔法がかけられていて、煙でさえも外に漏れる事がないような仕組みになっているのだ。

耳をふさぎたくなるほどの爆発音の後、檻の中を覆っていた粉塵が落ち着き始めると、檻のすぐそばで座って鑑賞していたオリオンが前のめりになった。

「なあ、ルイス。リリーちゃんってば可愛過ぎない？」

ギリギリした瞳で、ゴクリと喉を鳴らすオリオンに、ルイスは氷のように冷たい視線を浴びせた。

「・・・死ぬ」

オリオンはルイスの冷たい視線などまるで気にしていないように、座っていた大きなアームチェアをガタガタと動かしながらルイスのすぐ隣へと移動した。

「おい・・・！あまり近寄るな、気持ちが悪い」

ルイスは心底嫌そうにオリオンがいる方とは逆の肘掛けに肘を着きなおしながら、シッシツと手であしらおうとする。しかしオリオンはニコニコしたままアームチェアに深く座り直すと、近くに待機していた侍女へ紅茶のおかわりと、更には軽くつまめる軽食を頼んだ。

「俺だって好きでお前に近寄ってるわけじゃないさ！ただエイベルの性格上、お前の近くが一番の特等席だろうと思ってさ〜♪」

そんなオリオンの言葉にルイスは深い溜息をつくが、それ以上は何も言わなかった。ルイスが何かに気付いたように顔を上げる。檻の中から、再び話し声が聞こえてきたのだ。

「えーっと、どうしますか？まだやりますか？」

檻の中では、エイベルに後ろから羽交い締めにされたリリースカがジタバタと暴れている。

「な、なによこれ・・・！こんなの可笑いわ！？ちょっと！離しなさいよ！私はまだ本気出してないんだから！じゃなきゃあんたなんか

に・・・！」

キャンキャンと甲高く吠えるリリーシュカを、困った様な笑顔で見つめていたエイベルは、ふとリリーシュカの主人であるルイスの方へと顔を向ける。

「・・・良いんですね？」

しかしエイベルがルイスへと話し掛けた途端に、リリーシュカは髪の毛が逆立つほど大量の炎を全身に纏って怒り始めた。

「ちょっと！！私のルイスに話しかけないで！この私が！負けてないって言ってるでしょう！！？」

しかしリリーシュカの炎はエイベルには効かないようで、幾ら彼女が暴れてもビクとしなかった。

「くくッ！んもう！あんたなんなのよっ！？卑怯な真似してないで、いい加減ちゃんと戦いなさいよっ！」

しかしいくらリリーシュカが暴れても暴言を吐いても、エイベルの腕からは抜け出すことが出来ない。すると暫く傍観していたルイスが、静かに口を開いた。

「リリーシュカ、もう終わりか？」

「ッ！？ち、違う！まだ終わってないからっ！リリーシュカまだ戦えるもん！」

顔を真っ赤にしながら叫ぶが、しかし相手のエイベルはニコニコしながらリリーシュカを抱き締めている。先程までは確かに羽交い締め

していたはずだが、いつの間にか後ろから腕を回して、首筋に顔を埋めていた。

「えー？僕はもうリリーシュカさんと戦うのイヤです♡リリーシュカさんってすべて柔らかくて抱き心地が良いですし、最高に柔らかいし、何より・・・とーってもいい匂いがします♡」

「は、はぁ！？何をふざけた事をつ・・・！ちょっと！いい加減に離れなさいよ！この・・・変態っ！！」

スンスンと匂いを嗅ぐようにして引っ付いてくるエイベルを引き離そうと必死に藻掻いているが、ギューギューと力いっぱい抱き着かれているせいで、結局はリリーシュカの方が先に力尽きてしまった。

「ハア・・・あんた・・・なんでっ・・・ハア、ハア・・・こんな、力強いのか・・・！？」

息も絶え絶えなリリーシュカに比べて、エイベルはずっとニコニコしており、余裕の表情だ。さらに・・・

「えー？ふふ♡僕が強いのではなく、リリーシュカさんが弱すぎるのでは？」

「はぁぁぁ！？あんた・・・！馬鹿にしてんのっ！？」

椰揄うように言われた一言で更に真っ赤になったリリーシュカは、主人であるルイスに泣きつく。

「ルイスッ！こいつ私のこと舐めてるっ！ねえ、殺してもいいっ！？」

ルイスが契約主としての許可を出せばそれは可能となるのだが、しかしルイスは首を横に振る。

「ハア・・・気持ちには分かるが、流石に駄目だ」

契約者のいる妖精の命を奪う事は国の法律で禁じられている。ガツクリと肩を落とすリリーシュカとは反対に、抱き着いていたエイベルは意味深に笑みを深めた。

「ねえ、リリーシュカさん？もしも僕の腕から逃れられたら、貴方の勝ちでも良いですよ♡」

唐突なエイベルの提案に、リリーシュカはバツと顔を上げて後ろにいるエイベルを睨み付けた。

「ッ！？何よそれ！？アンタ本当にムカつく！そんな馬鹿な冗談ばかり言っていないでちゃんと戦いなさいよ！」

リリーシュカは腕を上げてせめてもの仕返しにとエイベルの頬を摘み上げようとしたのだが、しかしひょいと顔を逸らされて逃げられてしまった。

「アハハ。心外だな、本気ですよ♪でもその代わり、捕まっている間は僕の好きにさせてもらいますね♡じゃあ、よいスタート♡」

一方的に宣言すると、エイベルはリリーシュカの両手を一纏めにして、頭上から吊るすように持ち上げてしまった。屈辱的な格好にさせられたリリーシュカは当然の如く怒り暴れる。しかしエイベルの手がリリーシュカの身体を弄り始めると、途端に不愉快そうに顔を顰めた。

「はあ！？ちょっと！？アンタどこ触ってんのよ！？」

しかしエイベルの片手は遠慮なくリリーシュカの身体を滑ってゆく。リリーシュカは抵抗のつもりなのかエイベルの悪戯な手を避けようと

しているのか、身体をクネクネとくねらせる。しかしそのせいで、まるで誘っているかの様に腰を振っていることにまるで気がついていない。こんな風に捕らえられること自体が、初めてのことなのだ。

オリオンは口元が緩むのが抑えきれない様子で、ニヤつく口元を手で隠しながらリリーシュカが弄ばれている様子を愉しげに眺めている。

「いやあ、こりゃ思った以上に見応えのある試合だなあ♡」

堪らないといったように独りごちるオリオンの隣では、ルイスが眉間のシワを深めながら、同じく食い入る様に二人の試合を見つめていた。

エibelは暫くリリーシュカの様子を観察するように身体を撫でていたが、頤になった真っ白な脇を指先がスルリと通り過ぎたとき、リリーシュカの声色が変わった。

「キャア！~~~~ッ！ア、アンタねいい加減に・・・！ちょ！？や、止めて！ちょ、ちょ、ちょっと！変なとこ触らないでよっ！」

「あはは♡ここですか？」

エibelの手はリリーシュカが特に大きく反応した、脇の上でピタリと止まる。擦る様に指を細かくこしよこしよと動かされると、リリーシュカは悲鳴を上げながら激しく抵抗し始めた。

「ヒャアアアッ！？な、なんてことをっ！アアッ、ヒャッ！~~~~ッへ、変態変態変態！へんっ・・・た、いい・・・！」

左右を交互に擦られたリリーシュカは、次第にもじもじと身悶えはじめた。声はどんどんか細くなり、紅潮した頬にウルついた涙目がとても煽情的である。エibelはそんなリリーシュカにゾクゾクと嗜虐心を煽られながら、とても愉しい玩具を見つけたかのようにうっとり

目を細めた。

「あはは♡リリースユカさんってば、そんなに簡単に弱点を晒しちゃ駄目でしょう♡ほらほら♡もっと擦られちゃいますよ♡?♡」

エイベルはほんの僅かに爪先が当たる程度に圧を調整しながら、窪みに沿ってこしょこしょと執拗に擦っていく。

「ッ!弱点なんかじゃ、ナイんだ・・・からぁ・・・!も、いい加減に、はな、しなさ・・・ア、ヒヤンッ」

いつもよりワントーン高い声が聞こえ、リリースユカはカクン、と足の力が抜けてしまったようにエイベルの方へと倒れ込んだ。エイベルが咄嗟に抱き留めると、リリースユカは息を乱しながらもエイベルから距離を取ろうと手を突っぱねる。

「ッ離してよ・・・!」

本人は必死に手を突っぱねているつもりなのだが、しかし擦られた直後だからか、殆ど力が籠っていない。エイベルは逆にリリースユカを抱き寄せるようにしながら、背中をスルリと撫で上げた。

「ッぁぁ・・・!ア、アンタいい加減にしなさいよっ!??」

甘い声色が出たリリースユカは涙目でエイベルを睨みつけるが、エイベルはニコニコしながら再びリリースユカの細い手首を掴んだ。至近距離でジックリと目を合わせたまま、リリースユカに見せつけるかのように、小さな手の平をべろりと舐め上げる。

「ふふ♡早く降参した方が良くないですか?」

「なっ!?!何ですって!?!」

リリーシュカは信じられない気持ちで舐められた手の平とエイベルを交互に見ると、勢い良くその手を振り上げた。しかし・・・

ーパシッ

「おっと。ふふ、リリーシュカさんはちょっとお転婆ですね♡そんな貴方も可愛いですけど、僕はもうちょっとお淑やかな方がタイプかな
♪」

軽く受け止められた上に、指先に口付けまで落とされたリリーシュカはもう怒りで真っ赤だった。

「アンタの好みなんて知らないわよっ!もう!いい加減手を離して!」

リリーシュカはもう片方の手でエイベルを振り解こうとしたのだが、結局その手も呆気なく拘束されてしまう。

「はいはい♡大人しくしてくださいねー♡」

ダンスを踊るかの様に両手を掴まれながら連れて来られたのは、ルイスとオリオンの前だった。

「ッ!?!アンタ、何するつもり・・・!?!」

リリーシュカはルイスに合わせる顔が無いかのように、ソワソワとした様子で顔を背ける。しかしエイベルはリリーシュカの腕をグイッと持ち上げると、先程擦った脇を頭にさせた。

「ッ!?なに・・・!?止めて!」

リリーシュカは嫌な予感がしたのかジタバタと暴れるが、エイベルはリリーシュカの手を恋人同士が繋ぐようにギュ、と固く握りしめて頭上に固定すると、顔をゆっくりと下げていく。

「あんた、何をするつもりなの・・・!?ッ!今すぐに止めないと、酷い目に合うわよ!」

強張った声色で牽制するが、エイベルは上目遣いでふわりと微笑んだ後、ベーツと舌を出す。

「イヤでーす♡」

ーーペロッ

熱くヌメった舌で脇を舐められたリリーシュカは、声も出せない程混乱して、声にならない悲鳴を上げた。

「~~~~ッ!?!?」

まさか脇を舐める変態が実在するなんて、思ってもみなかったのだ。リリーシュカがあまりの出来事に固まっている内に、エイベルは熱い舌で、何度もペロペロと滑らかな淫みを舐め上げていく。しかしそうされている内に、リリーシュカはお腹の奥がジリジリと熱くなっている事に気付いた。

「や、め・・・なさ・・・い・・・!」

自身の思いもよらない身体の変化に慌てて抵抗を強めるが、しかし口を開けばなにやら変な声が出てしまいそうで、歯を食いしばりながら拒否するのがやっとだった。だが、その吐息混じりの甘さを含んだ声は、エイベル達をただ楽しませただけだった。

「んー・・・俺、リリちゃんのせいで新たな扉開いちゃいそう♡」

オリオンは眉を上げながら「なあ？」と隣にいるルイスに同意を求めるが、ルイスは不機嫌そうにフン、と鼻を鳴らした。

「飼い主に似たのか、やる事が随分と下品だな」

冷たい物言いにもオリオンが気分を害した様子は無く、大きく肩をすくめると、椅子をガタガタと動かしながら、より檻の近くに移動する。

「ああ、ほらリリーシュカさん♡ご主人様達が見てますよ♡こゝんなに恥ずかしい事をされているのに、まだ降参しないんですか？」

椰揄うように尋ねてくるエイベルに、リリーシュカはキツと目尻を吊り上げた。しかし口を開いた途端にエイベルが舌先でチロチロと撥つてくるので、すぐに口を噤む事となってしまう。涙目で睨むことしか出来ないリリーシュカを見ながら、エイベルは恍惚とした表情を浮かべる。

「・・・男性の煽り方に関しては素晴らしい才能をお持ちなんですね♡では意地っ張りのリリーシュカさん、頑張っていっぱい我慢してくださいね♡」

そう言うと、エイベルは口を大きく開けて、パクリとリリーシュカの脇を食べてしまった。

「はぁッ！？ッ！？ア・・・ツツッ！？」

リリーシュカが大きく目を見開く。そしてエイベルは先程までは何だったのかと言うほど、激しい舌使いでリリーシュカの身体を味わい始めた。ぬるついた熱い舌が、まるで他の生き物かのようにヌルヌルと腋を舐め回したかと思えば、デユツと強く吸い付かれ、その拍子に身体がビクリと大きく跳ねる。舌先だけを固くしながら、凹凸をなぞるかの様にチロチロと丁寧に舐められれば、ゾクゾクとした刺激が苦しくて、つい太腿を磨り合わせてしまう。

「や・・・めな・・・さいい・・・ッ！」

ハアハアと荒い吐息が漏れ出る唇の端からは、飲み込めなくなった涎がだらしなく垂れ始め、先程までエイベルを睨み付けていた澄んだ湖のような美しい瞳は、苦しげに歪められている。エイベルはワザとリリーシュカの嫌がる中央の凹みをクルクルと舐め回しながら、小首を傾げた。

「ふふ・・・♡本当にそう思ってます？」

エイベルの意味深な問いに、リリーシュカは涙目でキツと睨みつける。

「あ、たり・・・まえ・・・でしょう！」

するとエイベルは心底不思議だと言わんばかりに首を捻りながら、リリーシュカの真っ白なワンピースの裾から手を差し込んだ。

ーークチュ・・・♡